

大人の甘えと援助要請が個人・対人・集団に与える効果

新谷, 優 / NIIYA, Yu

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2015-05

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 25 日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730588

研究課題名(和文)大人の甘えと援助要請が個人・対人・集団に与える効果

研究課題名(英文)The influence of adults' amae on the self, others, and relationships

研究代表者

新谷 優(Niia, Yu)

法政大学・グローバル教養学部・准教授

研究者番号：20511281

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：大人の甘えは、単なる未熟さや依存とは異なり、相手の立場や関係の親しさなどを考慮に入れながら、対人関係を促進するためのツールとして戦略的に用いられていることを明らかにした。人は、甘える人には「やろうと思えば自分でできる」というコントロール感があるとみなし、相手との親しさやその時の感情をもとに、その甘えを受け入れるかどうかを決定していた。甘える人は、受け手の状況を手掛かりにしながらかえの受容を推測していた。さらに、甘える人ほど社会的スキルが高く、新しい環境により早く適応できることから、大人の甘えは対人関係を構築するための機能があり、戦略的に用いられていると言える。

研究成果の概要(英文)：Although amae among adults has often been criticized as indicating immaturity and dependence, this research showed that the Japanese often use amae as a strategy to promote relationships. People perceived that a requester of amae has more control over the situation and more ability to perform the task than a person who asks for help. Thus, when people perceive that a person is making an amae request, they feel they have more freedom to decide whether or not to grant the request and consider the closeness of relationship, feelings, and available resources to make their decision. The requester of amae relied on the same information to estimate the likelihood of acceptance. Moreover, the frequency of engaging in amae correlated positively with their social skills and predicted better adjustment to a new environment, even after controlling for the effect of social skills. These results suggest that when used strategically, amae can promote better relationships and well-being.

研究分野：社会心理学

キーワード：甘え 対人関係 親しさ 援助 社会的スキル 適応

1. 研究開始当初の背景

大人の甘えには、不適切な側面が必ず存在する(山口,1999)にもかかわらず、人は大人の甘えを好ましく感じる事が報告されている。たとえば、人は友人から甘えられないよりも、友人から甘えられた方がうれしく感じ(Niiya, Ellsworth, & Yamaguchi, 2006) あるいは程度までは、友人からの甘えの負担が増えるほど、うれしく感じていた(Niiya & Ellsworth, 2012)。

また、大人の甘えを好ましく感じるのは、甘えが関係の親しさを示すためであること示す研究も蓄積されてきている。人は、友人から甘えられない場合よりも、友人から甘えられた場合において、友人との関係が親密であると感じ(Niiya et al., 2006) 甘えの負担の増加がうれしい感情に与える影響は、関係の親しさの認知が完全に媒介していた(Niiya & Ellsworth, 2012)。サクラを用いた実験室実験では、初対面の相手からでも、甘えられると親しみが増し、好ましい印象がより強くなった(Niiya, 2010)。さらに、日本の成人 1000 名を対象にした郵送調査で、友人から甘えられた状況を回想してもらったところ、友人との関係が親しいと感じる人ほど、友人からの甘えをうれしく感じていた(Niiya & Harihara, 2012)。

しかし、これまでの研究では「甘えられてうれしい」と、「単に人助けをすることがうれしい」との区別ができていなかった。概念的な混乱は、甘えの研究を海外に発信する際に、障害となる。

また、大人の甘えは依存とは異なり、相手の立場を押し量りながら巧妙に行われていると考えられている(Okonogi, 1992)が、甘える側は、どのような手がかりを元に相手が甘えを受容してくれると推測しているのかは明らかになっていない。

さらに、甘えが対人関係に良い影響があるのであれば、甘える人本人の社会的適応にも影響を与えることが考えられるが、甘えのシナリオに対する反応や、実験室での甘えに対する反応を調べるこれまでの研究では、甘えの長期的な影響や、自然的環境の中での効果は検討できずにいた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の第一の目的は、甘える人に対する感情や評価は、単なる援助要請者に対する感情や評価とは異なることを明らかにすることである。甘える人には、「やろうと思えば自分でできる」というコントロール感があるのに対し、援助要請者には必ずしもコントロール感がない、という点で、甘えと援助要請は異なると仮説を立て、これを検証した。また、甘える人にはコントロール感があると思われるのであれば、人は援助要請よりも甘えの方が断りやすく、受容の条件も甘えの方がより複雑になると考え、これを検証し

た。

(2) 本研究の第二の目的は、甘える側が、自分の甘えが相手に受容してもらえるか推測する際に、関係の親しさや相手のコントロール感をどのくらい考慮に入れているのか、そしてその推測はどのくらい的確なのかを明らかにすることである。

(3) 本研究の第三の目的は、甘えが対人関係および社会的適応に与える長期的な影響を検討することである。特に、人は新しい環境に移った際に新たな人間関係を築く必要があり、また、助けを必要とする場面も多くなるため、素直に人に甘えられる人ほど新生活にスムーズに適応できるという仮説を立て、これを検証した。

3. 研究の方法

(1) 甘えと援助要請のちがいを明らかにするために、日本人大学生 97 名(女性 57%) に対して、シナリオ実験を行った。助けを求める人との親しさと、助けを求める人のコントロール感をシナリオで操作した。参加者は、「同じ授業をとっている仲のいい友人の M さん」または「ある授業で初めて知り合った M さん」が、「事故で手首を骨折してしまった」または「人気バンドのコンサートに行きたい」ことを理由に、M さんが自分で書くはずのレポートを参加者に書いてほしいと頼んできた、という 4 種類のシナリオのうち、一つを読んだ。その上で、M さんが頼みごとをしてきたことに対する感情、コントロール感の知覚、頼みごとの断りやすさ、頼みごとを受け入れる可能性、M さんとの関係の親しさについて評定してもらった。

(2) 甘える側がどのような条件で甘えが受容されると感じているか、そして、それが実際に甘えられる側が甘えを受容するときの条件に適合するのか調べるために、大学生の友人同士のパア 57 組を対象に調査を行った。どちらか一方がもう一方に甘えた出来事を特定してもらい、その状況での感情、親しさの認知、コントロール感、信頼感、負担の度合いなどを双方に評定してもらった。

(3) 甘えと社会的適応力の関係を調べるため、社会人 320 名にウェブ調査に協力してもらった。回答者が普段からどのくらい他者に甘える傾向があるか、大人の甘えをどのくらい肯定的にとらえているか、社会的スキル、他者への働きかけ、人と人を結びつける傾向、一般的信頼などの評定を行ってもらった。また、大学生 112 名にも質問紙調査を行い、甘える傾向や甘えに対する態度、社会的スキルの他に、外向性、大学への適応感、孤独感、うつ傾向、友人の数などについて回答を求めた。

さらに、甘える人ほど新しい環境へ早く適

応するのかを調べるため、大学一年生が通年で履修するクラス(40名)にて、縦断調査を実施した。入学時(4月)、一学期終了時(7月)、一年目終了時(1月)の計3回にわたり、本人の自己評価による甘えの度合、クラスメイト一人一人について、自分がその人に甘える度合いと、自分がその人から甘えられる度合、及びその人との親しさを評定してもらった。また、個人の大学への適応度も測定した。

4. 研究成果

(1) 甘えと援助要請は以下の点で異なることが明らかになった。人は、助けを求める人にコントロール感がない場合よりも、コントロール感がある場合に、その頼みごとを甘えとみなす。人は、援助要請よりも、甘えの方が自由に断ることができると感じる。甘えを受け入れるかどうかは、相手との親しさの認知や、そのときの感情が大きく影響するのに対し、援助要請では、それほど影響しない。つまり、援助要請に比べ、甘えはより複雑な心理プロセスを必要としていると言える。甘える人にはコントロール感があるという点は、甘えを依存や愛着と区別した研究の知見と合致する(Behrens, 2004; Yamaguchi & Ariizumi, 2006)。援助要請者は、相手の好意に依存する必要があるのに対し、甘える人は、いざとなれば自分でできるという効力感があるため、一つの戦略として甘えを用いることが考えられる。

(2) 甘える側と甘えられる側が、それぞれどのような要因で甘えをうれしく感じ、甘えを受容する(受容してもらえらると思う)か、さらに甘える側は、相手の心理状況をどの程度推測できているのか検討した。その結果、まず、甘えられる側は相手に親しさを感じ、自分にコントロール感があり、十分な資源があると感じるほど甘えを受容していた。一方、甘える側は、相手が自分に対して親しさを感じ、相手にコントロール感があり、十分な資源があると推測するほど、甘えが受容されると推測していた。つまり、甘える側は相手と同じ心理モデルを用いて甘えの受容を予測していると言える。さらに、甘える側と甘えられる側の信頼と親しさの感じ方のズレが小さいほど、甘えられる側は、甘えをうれしく感じ、受容することが明らかになった。つまり、甘えられる側が快く甘えを受け入れるには、双方が同程度に互いを親しく感じている必要があるといえる。しかし、その推測とは裏腹に、甘える側が相手からの親しさと相手の資源を高く見積もるほど、実際の甘えの受容は低下しており、双方に複雑な駆け引きがあることが浮き彫りになった(図1)。甘えられる側のコントロール感が受容の重要な要因であることを考えると、甘える側が過度な期待をもつと、甘えられる側は自分のコントロール感が阻害されると感じ、受容しにくくなると解釈することができる。

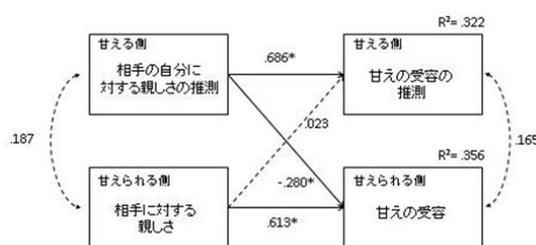


図1 甘える側と甘えられる側から見た親しさと甘えの受容のモデル(数値は標準化係数)

(3) 甘えと社会的適応力との関係を調べた調査では、甘える傾向がある人ほど社会的スキルが高く、一般他者へ積極的に働きかけ、人と人を結びつける傾向があり、一般的信頼も高かった。また、対人関係に積極的である人ほど、大人の甘えに対して肯定的な態度をもつことから、人は甘えを対人関係の潤滑油と考えているといえる。大学生サンプルでも、甘える人ほど、また、甘えに対して肯定的な態度をもつ人ほど外向的であり、友人や特別な他者からサポートがあり、大学に居心地の良さを感じ、孤独感が低かった。新入生サンプルでは、甘えと社会的サポートとの相関は弱かったものの、甘えと外向性、社会的スキル、居心地の良さ、孤独感、うつ傾向との相関が、上級生のサンプルよりも強かった。新入生サンプルでは、さらに、甘える人ほど同じクラスに仲の良い人が多く、一週間で話した人の数も多かった。外向的な学生ほど気軽に他者に甘えることができるが、特に新入生に関しては、甘えは社会的スキルを必要とする課題なのかもしれない。甘えと適応の相関が新入生の方が強いのは、新しい環境に適応し、新しい人間関係を築く際に、甘えが特に役に立つ可能性を示唆する。一方、甘えと社会的サポートの相関が新入生よりも上級生でより顕著なのは、甘えにより社会的サポートのネットワークを構築していくためと解釈することができる。

甘えと新環境への適応の関係性を調べるために行った大学新入生を対象とした縦断調査では、入学時に自分は甘える傾向があると答えた学生ほど、学年末の大学生活の満足度が高いことが明らかになった(図2)。同様に、入学時に甘える傾向のある学生は、学年末に大学に居心地の良さを感じ、課題・目的意識も高かった。学生の外向性も社会的スキルも入学時の甘える傾向と強い正の相関があったが、これらの影響を統制しても、入学時の甘えは学年末の満足度、居心地の良さ、課題・目的意識を有意に予測していた。大人の甘えは本人の未熟さを表し、不適切な言動を含むと言われるが、助けを求めるといふ点と人間関係を促進するという点において、甘えは新環境への適応を助けると考えられる。

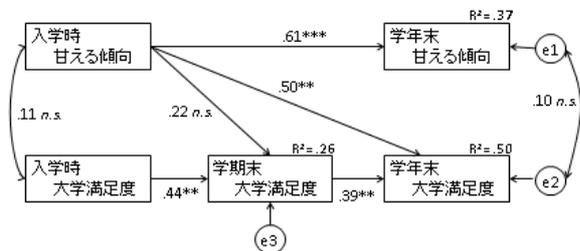


図2 入学時の甘える傾向が学年末の大学満足度を予測するモデル(数値は標準化係数, *** $p < .001$, ** $p < .01$)

<引用文献>

- Behrens, K. T. (2004). A multifaced view of the concept of amae: Reconsidering the indigenous Japanese concept of relatedness. *Human Development, 47*, 1-27.
- 新谷優 (2010). 大人の甘えは対人関係を促進するか、日本社会心理学会第 51 回大会、広島大学。
- Niiya, Y., & Ellsworth, P. C. (2012). Acceptability of favor requests in the U.S. and Japan. *Journal of Cross-Cultural Psychology, 43*, 273-285.
- Niiya, Y., Ellsworth, P. C., & Yamaguchi, S. (2006). Amae in Japan and the United States. An exploration of a “culturally unique” emotion. *Emotion, 6*, 279-295.
- Niiya, Y. & Harihara, M. (2012). Relationship closeness and control as determinants of pleasant amae. *Asian Journal of Social Psychology, 15*, 189-197.
- Okonogi, K. (1992). Amae as seen in diverse interpersonal interactions. *Infant Mental Health Journal, 13*, 18-25.
- 山口勤 (1999). 日常語としての「甘え」から考える 北山修(編) 日本語臨床 3: 「甘え」について考える (p.31-46) 星和書店
- Yamaguchi, S., & Ariizumi, Y. (2006). Close Interpersonal Relationships among Japanese: Amae as Distinguished from Attachment and Dependence. In *Indigenous and cultural psychology: Understanding people in context.* (pp.163-174). New York, NY: Springer Science and Business Media.

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計4件)

- 新谷優「甘える側と甘えられる側から見た甘えの受容の要因」日本心理学会第 78 回大会、2014 年 9 月 10 日、同志社大学今出川キャンパス(京都府・京都市)
- 新谷優「甘える人は世渡り上手か：社会的スキルと適応との関係」日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会、

2014 年 9 月 6 日、東洋大学白山キャンパス(東京都・文京区)

新谷優「適応力としての甘え：甘える人ほど新たな環境に早く適応するか」日本社会心理学会第 55 回大会、2014 年 7 月 27 日、北海道大学札幌キャンパス(北海道・札幌市)

新谷優「甘えと援助要請はどう異なるのか」日本グループ・ダイナミックス学会第 59 回大会、2012 年 9 月 23 日、京都大学吉田キャンパス(京都府・京都市)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

新谷 優 (NIIYA, Yu)

法政大学・グローバル教養学部・准教授

研究者番号：20511281